

序論

グローカリゼーションと越境

—グローバル研究で読み解く社会と文化—

上杉富之

人、モノ、情報やカネが世界中で大規模かつ迅速に移動し、世界が地球規模で緊密かつ強力に結び付くようになってすでに久しい。こうしたグローバル化の時代にあって、私たちの社会や文化は、今、急激かつ根本的に変化しつつある。本書は、今日の変動・変容しつつある社会や文化の実態を、「グローカリゼーション」(グローバル化)と「越境」(トランスナショナルリズム)をキーワードにして可視化ないし対象化し、より良い未来社会の構築に向けてその意味や意義を検討することを目指した研究プロジェクトの成果の一部を刊行するものである⁽¹⁾。

以下、まず、本書のキーワードとなっているグローカリゼーションと越境について、その現象ないし過程の今日性や意味内容を確認する。そして、そうした今日的な社会・文化的現象を可視化ないし対象化し、理論的かつ実証的に研究するために構想した新たな研究領域、「グローバル研究」についてその概要を述べる。その上で本書を構成する3編の論考を紹介し、グローバル研究のなかでの意義を明らかにする。

1. グローカリゼーション

(1) グローバリゼーション

現代の社会や文化を読み解くもっとも重要な言葉ないし概念の一つがグ

ローバリゼーション（グローバル化）であることに異論はあるまい。そのことは、例えば、1997年に初版を刊行して以来版を重ねている大部の社会学の教科書が『社会学—グローバル社会学入門—』と銘打たれていることからもうかがえよう⁽²⁾。

グローバルゼーションをごく簡単に定義するならば、「政治や経済、社会、文化等のさまざまな点で、世界があたかも一つの場になる過程ないし現象」ということができよう(Abercrombie, Hill and Turner 2006: 167 参照)。1960年代以降、特に1980年代以降の交通・輸送手段や情報伝達技術の急速な発展・発達に伴い、世界各国、各地域の経済や政治、社会、文化等は互いに密接に結びつけられ、地球全体があたかも「一つの村」(global village)と化している(マクルーハン 1986[1962], 1987[1964]参照)。

しかしながら、グローバルゼーションの評価をめぐるでは、研究者やマスメディア、一般の人々の見方が大きく2つに分かれている。Macionis and Plummer (2008)に従って、ここでは、グローバルゼーションの否定的見方を「グローバルゼーションの均質化論」(globalisation as homogenization。以下、「均質化論」と略述)、肯定的見方を「グローバルゼーションの多様化論」(globalisation as diversification。以下、「多様化論」と略述)と呼んでおこう。

均質化論によると、グローバルゼーションとは、欧米や日本のような先進諸国の文化が非欧米発展途上国の文化を圧倒し、場合によっては消滅させ、世界中の文化を均質化(平準化)する現象であるという。従って、グローバルゼーションは欧米先進諸国が非欧米諸国を文化的に従属させる文化的帝国主義に他ならず、世界は西洋の近代化をモデルとしてただ一つの近代化を成し遂げつつある(成し遂げるべき)とみなす(次頁の表を参照)。世界の均質化ないし平準化に反対する立場から見ると、グローバルゼーションとは実際のところ世界でもっとも強大な国アメリカが世界に自国の文化や価値観、制度を押しつける「アメリカ化」(Americanization)に他ならず、それゆえ、アメリカを象徴するファストフード店、マクドナルドに因んで「マクドナルド化」(MacDonaldization)とも言われる。

一方、多様化論によると、グローバルゼーションとは欧米や日本のような

表1 グローバリゼーションの「均質化論」と「多様化論」

均質化としてのグローバリゼーション globalization as homogenisation	多様化としてのグローバリゼーション globalization as diversification
文化的帝国主義 cultural imperialism	文化的小惑星化 cultural planetisation
文化的従属 cultural dependence	文化的独立 cultural independence
文化的支配／被支配 cultural hegemony	文化的相互浸透 cultural interpenetration
自律（独立） autonomy	混淆、雑種化 synthesis, hybridisation
単一の近代化 modernisation	複数の近代化 modernizations
西洋化 westernisation	地球規模の「ごたまぜ」 global m?lange
文化的同調 cultural synchronisation	（文化的）クレオール化／横断 creolisation/crossover
世界規模の文明の意識 world civilisation	地球規模の人間界の意識 global ecumene

(出典：Maconis and Plummer 2008: 847-848)

先進諸国の文化が非欧米発展途上国の文化を必ずしも消滅させることを意味せず、むしろ融合して新たな雑種文化を生成する、多様化の現象ないし過程であるとみなす。従って、グローバリゼーションは、場合によっては、非欧米諸国が独自の文化（圏）を持った小惑星（小宇宙）となる契機をもたらすものとする。言葉を換えて言うならば、世界は西洋をモデルとするただ一つの近代化の道をたどらず、小惑星ごとの複数の近代化を成し遂げつつある（成し遂げていく）ものとみなす。

実際のグローバリゼーションの議論はもちろんこれほど単純なものではない。しかしながら、グローバリゼーションの議論はおおむね以上の2つの議論のバリエーションとみなすことができるであろう。筆者はこの種の議論の立て方には、少なくとも以下の二つの点で大きな問題があると思っている。

一つには、いずれの場合でも、グローバリゼーションに賛成か反対か、グローバリゼーションを受容するか排除するかなどというような二者択一的な議論に陥っているということである。均質化論者は、グローバリゼーションによって世界各国・各地域の固有の文化が圧倒されて破壊・消滅し、世界中のすべての社会や文化が欧米先進諸国のそれと同質になってしまうと言い募り、グローバリゼーションの拡大・浸透をこのまま野放しにしてよいのかと問いかける。大多数の人はもちろん「否」と答えるであろう。一方、多様化論者は、世界各国、各地域の固有の文化は簡単には圧倒されず、ましてや破壊・消滅することはなく、むしろ外部の刺激を受けて雑種文化を生み出して多様化するのだから、グローバリゼーションをむしろ歓迎すべきものではないかと問いかける。このように問いかけられれば、大多数の人はもちろん「是」と答えるであろう。

この種の議論はいずれも暗黙の前提を共有しているように思われる。それは、私たちが主体的にグローバリゼーションを受容したり拒否したりすることが可能で、それによってグローバリゼーションの拡大や浸透を抑制したり、あるいは、グローバリゼーションが拡大・浸透する以前の時代に戻すことも可能であるということである。しかしながら、言うまでもないことであるが、私たちにとってグローバリゼーションはもはや受容や拒否できる対象ではなく、既存の「現実」である。私たちはグローバリゼーションの恩恵も日々享受しており、今さらそれ以前の時代に戻ることなど考えられない。従って、私たちが取り組むべきことは、グローバリゼーションの拡大や浸透を当たり前のこととして受け入れつつ、グローバリゼーションの利点や欠点をいかに良い方向にコントロールするかを考えることである。

二つ目の問題は、グローバリゼーションの「中心」(起点)と「周縁」(終点・到達点)が互いに独立しており、グローバリゼーションは「中心」から「周縁」に一方向的に影響が及ぶ現象ないし過程であるとみなしていることである。グローバリゼーションの概念自体には、グローバリゼーションの「中心」と「周縁」というような空間的配置やそれが含意する「力」関係の差異は盛り込まれていない。しかしながら、グローバリゼーションがしばしば「アメリカ化」や「マクドナルド化」と同一視されることからわかるよう

に、グローバリゼーションの概念ないし現象・過程には明らかにグローバリゼーションの起点としての「中心」と終点としての「周縁」の間の区別がある。加えて、「中心」と「周縁」という概念には、両者の間に「力」の不均衡があることも含意されている。

グローバリゼーションをめぐる議論のなかで暗黙の前提とされている上述の二つの点を明示化し、その問題に取り組むために導入された言葉ないし概念こそがグローカリゼーションであった。

(2) グローカリゼーション

The Oxford Dictionary of New Words (1991) によると、グローカリゼーション (glocalization) という言葉は、世界市場に乗り出していった日本企業が1980年代初めに使い始めた業界用語に起源を持つという。当時、世界市場に進出していった日本企業は、販売先国や地域ごとのローカル（現地）のニーズに合わせて製品やサービスを加工・修正するという「現地化」戦略を取って大成功を収めていた。こうした販売戦略は、グローバル市場をターゲットにしつつも (globalization) ローカルごとのニーズに合わせる (localization) という意味で、global localization と言われていたという。この複合語がほどなくして一つの言葉に短縮され、1980年代の終わりから1990年代初めには glocalization (グローカリゼーション) という和製英語に置き換えられたという⁽³⁾。

日本企業が使っていたグローカリゼーションという業界用語に着目し、グローバリゼーション概念を補完する学術用語としてグローカリゼーション概念を1990年代の初めに学界に導入したのが、イギリスの社会学者、ロランド・ロバートソン (Roland Robertson) であった (Robertson 1992, 1995 参照)。ロバートソンは、グローカリゼーションという新しい用語を学界に導入することによって、グローバリゼーションがローカリゼーションと常に同時に起こる現象ないし過程であることを明らかにした。

ロバートソンはまた、ローカリゼーションが固有の空間と固有の歴史を持った場で進行することから、同一のグローバリゼーションの波をこうむったとしてもそれぞれのローカルな場に応じて異なったグローバリゼーション

の「効果」が発現することも明らかにした。このことは、欧米先進諸国を起点とする西洋流の近代化の波を周縁の国や地域が受けたとしても、ここではローカルな文脈に合わせてさまざまなタイプの近代化が進行することを示唆するものであった。それゆえ、ロバートソンら（Featherstone, Lash and Robertson (eds.) 1995）は、グローバリゼーションに伴う世界各地の近代化の実態や理論を論じた論文集に、単数の近代性（modernity）ではなく、複数の近代性（modernities）というタイトルをわざわざ付けている⁽⁴⁾。この種の考え方は、グローバリゼーションの議論の文脈では、グローバリゼーションの多様化論の系譜に連なるものと言えよう。

ロバートソンによる導入以降、グローカリゼーション概念は徐々に普及、定着し、例えば、*The Penguin Dictionary of Sociology* (5th ed.) (2006)では以下のように定義されている⁽⁵⁾。

〈グローカリゼーション〉

世界（グローバル）市場向けの製品に、販売先国ごとのローカルな好みに合わせて改良を加えるという販売戦略に因む用語。社会学では、ローカルな文化とグローバルな文化が相互に影響を及ぼし合う現象のことを言う。また、ローカルな文化がグローバル化し、グローバルな文化がローカル化する過程を意味する。

The Penguin Dictionary of Sociology (5th ed.), 2006: 170

2. グローカル研究の構想

(1) グローカリゼーション概念の再定義

グローバリゼーション概念を補完ないし補足するために導入された概念がグローカリゼーションであったが、両概念には払拭できない二つの問題点が「暗黙の前提」として残っているように思われる。すなわち、「影響・作用の一方向性」の問題と「力の不均衡」の問題である。

「影響・作用の一方向性」の問題というのは、グローバリゼーションとグ

ローカリゼーションのいずれの概念においても、影響や作用の「起点」（中心）と「終点」（周縁）が想定されており、もっぱら欧米や日本等の先進諸国（大都市）の起点（中心）が非欧米の発展途上国（村落）の終点（周縁）に影響や作用を及ぼすとみなされているということである。グローバリゼーションやグローカリゼーション概念には、欧米や日本等の先進諸国の大都市で経済や政治、社会、文化等の変革（イノベーション）が起こり、そこを起点として変革の波が拡大し、非欧米諸国の大都市等を経由して地方都市や村落部へと浸透していくというシナリオが織り込まれている。

時として、「中継地」を経ず、欧米や日本の大都市から直接辺境地帯の村々にまでグローバル化の波が達することもあろう。あるいはまた、辺境地帯を「起点」として欧米や日本等の先進諸国へグローバリゼーションやグローカリゼーションの波が広がることもあろう。しかし、この種の現象が時として「逆グローバリゼーション」（reverse globalization）と呼ばれていることからわかるように、「正しい」（通常の）グローバリゼーション（及びローカリゼーション）はあくまでも欧米や日本等の先進諸国を起点として、非欧米諸国の終点へと拡大するものとみなされている。グローバリゼーションやローカリゼーション概念には、政治や経済分野のみならず社会や文化の分野の影響・作用についても、欧米先進諸国の「起点」（中心）から非欧米諸国の「終点」（周縁）への不可逆的な流れ（一方向性）が暗黙の前提として織り込まれていると言えよう。

他方、「力の不均衡」の問題というのは、グローバリゼーションによって欧米や日本等の先進諸国の社会制度や文化要素等が非欧米の発展途上国に流入・浸透して多大な影響を及ぼし、時として破壊や消滅さえ招きかねないということである。このことは上記の「影響・作用の一方向性」と密接に関連しており、これまで、「中心」と「周縁」の間の力の不均衡として論じられてきた。

ローカリゼーション概念の導入は、グローバリゼーションとともにローカリゼーションにも焦点を当て、両者が不即不離の関係を保ちつつ同時に進行することを明らかにしたという点で今日の社会・文化研究に多大な貢献をしたのは間違いない。しかしながら、ローカリゼーション概念の導入後

も、ローカル（周縁）がグローバル（中心）に対してつねに「受動的」かつ「劣位」として位置づけられることには変わりはない。言うまでもないことであるが、周縁は必ずしも劣位にあるとは限らない。優位とまでは言わないまでも、周縁と中心との間の優劣関係が崩れ、均衡が発現したり逆転したりすることさえある。しかしながら、これまでのグローカリゼーション概念では中心が優位、周縁が劣位というような力の不均衡が不動の前提として残されたままである。

以上のような問題意識から、筆者は、グローカリゼーション概念を以下のように再定義することを提唱している。

グローカリゼーションとは、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行する現象ないし過程である。

以上のように再定義することにより、グローバリゼーション概念に基づいたがためにグローカリゼーション概念に内包されたままとなっている「影響・作用の一方方向性」と「力の不均衡」の問題をある程度は解消することができると思う。例えば、これまで「逆グローバリゼーション」と言われてきたような現象・過程をそれ自体として正当に対象化し、評価することができるようになるものと期待される。

また、グローバリゼーションとローカリゼーションが相互に影響を及ぼしながら進行すると定義することにより、両者の間の「力の不均衡」を意識しつつも、そうした「力の不均衡」に均衡をもたらしたり、場合によっては逆転したりするような現象や過程にも目配りすることができるようになるであろう。

(2) グローカル研究

再定義したグローカリゼーションをキーワードとして、グローバリゼーションとローカリゼーションをめぐる社会的、文化的現象や過程に実証的かつ理論的に取り組むものとして新たに構想した研究分野が、以下に述べる

「グローバル研究」(glocal studies)である。

①定義

グローバルゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしつつ進行する過程ないし現象をグローバルゼーションと定義し、グローバルゼーションの実態や効果・影響を実証的かつ理論的に明らかにする研究を「グローバル研究」と呼ぶ。

②目的

グローバル研究を通して、今まで見過ごされてきた今日的な問題や課題をローカル(地域や地方)な視点から「対象化」(objectify)ないし可視化するとともに、著しく均衡の崩れた「中心」(欧米社会)と「周縁」(非欧米社会)の間の関係をローカルな立場から「対称化」(symmetrize)することを旨とする。

③意義

グローバルゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行するグローバルゼーションの実態を明らかにし、ローカルな視点や立場を強調しつつ、より柔軟な社会と文化のあり方を構想・提示することを可能とする。

3. 越境

グローバル研究を実施するに当たっては、現代のさまざまな社会的・文化的過程ないし現象が対象となるであろう。例えば、グローバルゼーションとして進行する社会接触や共同体の再編などが重要なトピックとして考えられる⁽⁶⁾。その中でもとりわけ重要と思われるのが、人や文化の「越境」に関するグローバル研究である。

経済のみならず政治や社会、文化等のあらゆる分野におけるグローバルゼーションがもはや疑いのない事実となり、それに対する関心が最高潮に達した1980年代の終わりから1990年代の初めに、人の大規模な移動、すなわ

ち移民に関して、これまでとはまったく異なった新たな事態が生じていることが明らかとなった。「越境」(トランスナショナリズム)である。

1990年代までの移民研究では、移民、特に出稼ぎ移民労働者たちは最終的には出身国に戻る(帰還)か、あるいは移民先国に帰化して定住するものと考えられていた。ところが、1990年前後から、出身国に戻らず、かといって移民先国に帰化もしないような移民たちが急に目立ち始めた。こうした移民たちは、1980年代に急速に発達した簡便かつ時として安価な輸送・交通手段を使い、移民受入国と出身国の間を、国境を越えて、長期にわたって頻繁に行き来するようになった。また、当初は電話、後にはインターネット等の情報伝達技術を使い、移民たちはあたかも母国にいるのと同じように、時としてそれ以上に頻繁に、出身国に留まる家族や友人、知人と連絡を取り合うようになった。

その結果、こうした移民たちは出身国と移民先国の二つの国の言葉を自在に操る等、複数の文化を同時に持つようになった。また、出身国の国籍(市民権)を保持したままで移民先国の永住権を取得し(永住権保持者)、場合によっては二つ以上の国の国籍(市民権)を同時に持つなど(重国籍)、複数の国に合法的に帰属するようにさえなっている⁽⁷⁾。

1990年代の初め、こうした新たな移民のあり方は、国(nation)を越えている(trans-)という意味で、トランスナショナル(transnational)と表現されるようになった。そして、状態や現象を意味する接尾辞-ismが付加され、トランスナショナリズム(transnationalism)という新たな言葉で概念化された⁽⁸⁾。その後、トランスナショナリズム概念は移民問題のみならず、さまざまな社会的、文化的現象を説明する用語としても使用されるに至っている。

トランスナショナリズム(transnationalism)及びトランスナショナル(transnational)という言葉は通常「越境」と訳されている。本書でも、トランスナショナリズムの訳語として、すでに定着していると思われる越境という言葉を用いる。しかしながら、トランスナショナリズムに越境の訳語を充てる場合には以下の点に注意が必要である。

日本語の越境は、「境界、特に、国境を不法に越えること」(『大辞林』第

3版、2006年)ないし「境界線や国境などを越えること」(『広辞苑』第6版、2008年)を意味する。すなわち、越境とは境界を越えるという動作を意味し、恒常的な状態を意味してはいない。

従って、越境という訳語を使うと、まず第一点として、トランスナショナリズムやトランスナショナルという言葉が明示する、国境を越えた移動に関する概念であるという点が不明瞭となる。トランスナショナリズムやトランスナショナルという用語は、本来のグローバリゼーションに伴って注目されるようになった、国境を越えた移動に関する用語として用いるべきであろう。

第二に、越境という訳語は境界を越えるという「動作」を意味し、トランスナショナリズムやトランスナショナルという言葉が本来持っていた、境界を越えた結果として越境している「状態」となっているということを意味しない点が挙げられる。越境という訳語を使用することにより、問題関心の焦点が本来のものと微妙にずれていることに留意しなければならない。

第三点として、第二点とも関連するのであるが、越境という訳語が、トランスナショナリズムやトランスナショナルという語が含意する、越境の結果として複数の国に同時に帰属するという状態や様態を表わしていないことにも留意する必要がある。

以上のごとく、「越境」という訳語は、原語のトランスナショナリズムないしトランスナショナルという言葉・概念が対象化・焦点化するいくつかの重要な点を不鮮明にしてしまっている。しかしながら、その点を十分に認識するならば、越境という訳語を使い、越境現象や越境過程の実証的、理論的研究に取り組むことは、1990年代以降にますます明確となりつつあるグローバリゼーションとローカリゼーションが同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行する現象ないし過程の研究、すなわちグローバル研究のもっとも有望な研究となるであろう。

4. 本書の構成

グローカリゼーションと越境をキーワードとして編んだ本書は、工藤論文と長坂論文、上杉論文の三編の論文から構成されている。工藤論文と長坂論文はともに人の越境に関するものであり、一方、上杉論文は文化の越境に関するものである。

工藤論文は、経済のグローバル化に伴って国境を越えて移動・移住する労働者（移民労働者）が形成する家族に焦点を当て、グローバルレベルとローカルレベル（移住先国及び出身国など）の政治や社会、文化的諸条件等を考慮しつつ、移民労働者たちが家族（関係）をどのように変容させ、再構築しているのかを明らかにしている。具体的には、日本にやってきたパキスタン人男性移民労働者たちの家族形成やその後の生活戦略を紹介し、近年増えつつある、複数の国に家族メンバーが分散して住む「トランスナショナル家族」に注目する。

工藤によると、日本にやってきたパキスタン移民労働者の一部は、日本人女性と結婚して家族を形成するに当たり、帰化して日本国内に留まることもせず、かと言って妻子を連れてパキスタンへ帰還することもしない。日本人の妻と子をニュージーランドやアラブ首長国連邦等の第三国に住ませ、本人は日本（及び当該第三国）を生活拠点としつつ、日本と妻子の住む第三国、それに出身国であるパキスタンの間を頻繁に行き来しながら生活するという。

家族メンバーが国境を越えて複数の国に分散居住し、それら複数の国の間を日常的に往来しながら生活するこの種の家族を、工藤は、従来報告されていた本国（出身国）への帰還や移住先国への定住とはまったく異なるものであるとし、「トランスナショナルな家族」と呼ぶ。そして、こうしたトランスナショナルな家族の形成は、出身国や移住先国のローカルな政治、経済、社会、文化的な状況に制約されつつも、グローバル化した世界の状況に適合した移民たちの生活戦略の結果であるとする。本書の共通テーマ、グローカリゼーションに即して言うならば、工藤の報告するトランスナショナルな家

族は、グローバルレベルとローカルレベルの政治、経済、社会、文化的ニーズをすり合わせて（接合して）形成した、「グローバルな家族」ということもできよう。

長坂論文も、経済のグローバル化に伴って他国に職を求めて移住したフィリピン人移民労働者の「トランスナショナルな家族」を扱っている。しかし、長坂の関心は、トランスナショナルな家族（メンバー）が移住先国と出身国であるフィリピンの間を頻繁に往来するというような意味での越境実践（越境行動）ではない。長坂の関心は、トランスナショナルな家族の中で生きるという意味での越境実践（越境意識）、特に「移動する子どもたち」の移住経験にある。

フィリピンは移民労働者の送出国として世界的に有名であり、それゆえ移民研究が盛んである。しかしながら、「移動する子どもたち」に焦点を当てた研究はこれまでほとんどなかったという。本論文で、長坂はこれまで等閑視されてきた移動する子どもたちに焦点を当て、子どもたちの自己意識（アイデンティティ）の形成や変容、社会的ネットワークの構築・再構築に関する研究が必要であることを述べる。そして、そうした研究で取り上げるべき課題を予備的に検討する。

長坂は、「移動する子どもたち」に焦点を当てた研究を行うためには、もっぱら移民の世代論で使用されてきた「第1.5世代移住者」（移民第1.5世代）という用語を再概念化（再定義）することを提唱する。周知のように、移民研究では、移民当事者は移民第1世代、移住先国で生まれた子は移民第2世代と呼ばれる。これに対し、親の出身国で生まれた後、親（移民第1世代）に移民先国に呼び寄せられる子どもたちは、現地生まれの子どもである移民第2世代とは区別して、移民第1.5世代（第1.5世代移民ないし移住者）と呼ばれる。長坂は、これまでただ単に世代概念としてのみ使われてきた移民第1.5世代という概念を、子どもたちが出身国社会から移民先国社会へ移動、移行するプロセスに焦点を合わせるための用語として再定義することを提唱する。そうすることによって、グローバル化した世界を移動する子どもたちが複数の国にまたがるトランスナショナルな社会（家族）の中で、出身国と移民先国のローカルな状況に合わせて自己意識や社会的ネット

ワークを構築、再構築している実態を明らかにすることが可能であると述べる。

以上の二編の論文がグローバル化に伴う人の移動の問題を扱っているのに対し、上杉論文は、グローバル化に伴って越境する文化を取り上げる。

韓国と日本には、素潜りでサザエやウニ、テングサ、ワカメなどを漁獲する女性潜水漁師、海女がいる。2000年代の半ば、韓国と日本で、海女の潜水漁技術や海女漁をめぐる儀礼や信仰、生活文化等を独自の「海女文化」とみなし、両国が協力してユネスコの無形文化遺産へ登録しようとする運動が始まった。上杉はこの運動の成立と展開過程をたどり、この運動がグローバルレベルの二つの出来事、サッカーの世界カップの日韓共同開催とユネスコの無形文化遺産条約の成立への韓国と日本のローカルな対応であったと分析する。そして、この運動の展開が、グローバリゼーションの「中心」が「周縁」に影響を及ぼす事例としてばかりでなく、逆に、「周縁」が「中心」に影響を及ぼす事例とみなし得ることを明らかにする。と言うのは、この運動は、ユネスコの文化政策の根底に根強く残る文化観、すなわち「ある特定の民族や国・地域がその民族や国・地域に固有の一つの文化を持つ」という「1対1対応」の文化観に変更ないし修正を迫るものであるからである。

以上、本書を貫く二つのキーワード、「グローカリゼーション」と「越境」の概要について簡単に説明するとともに、グローカリゼーション概念を核として構想した「グローカル研究」について述べた。また、本書を構成する三編の論考の概略を述べるとともに、グローカル研究の観点から、各論考の意味や意義について述べてきた。

本書の執筆者全員が必ずしもグローカリゼーションという言葉ないし概念を使っているわけではないし、グローカル研究の観点から人や文化に関する越境現象ないし過程を記述、解釈しているわけでもない。しかしながら、いずれの論考も、経済や政治、社会、文化のグローバリゼーションに伴って国境を越えて移動し、複数の国にまたがっているような家族や社会関係、文化に焦点を当て、それらの構築や再構築、再定義を、グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行する現

象ないし過程として対象化し、理論化しようとしている点では一致している。また、今日の流動化し、越境して複数化、多層化、多元化した社会的、文化的現象や過程を可視化し対象化するためには、これまでのグローバリゼーションの議論とは異なった新たな理論や方法論が必要であると考えている点でも一致している。グローカリゼーションと越境に焦点を当てた本書が、従来の閉塞したグローバリゼーション研究に一石を投じ、新たな研究の端緒を開く一助になれば幸いである。

注

- (1) 本書は、成城大学民俗学研究所を研究拠点とする文部科学省戦略的研究基盤形成支援事業、「グローバル化時代に再編する日本の社会・文化に関する地域・領域横断的研究」(研究代表・松崎憲三教授、2008年度～2010年度)の中の研究プロジェクト、「グローバル化に伴う越境の実態調査と理論構築」の研究成果の一環として刊行されるものである(本書の「あとがき」参照)。
- (2) 和文タイトルは筆者の仮訳。原書は Macionis and Plummer, 2008, *Sociology: A Global Introduction*。1997年の初版以来すでに4版を重ねている。
- (3) glocal ないし globalization の語源等については、S. Tulloch (comp.) *The Oxford Dictionary of New Words*, p. 134 を参照。なお、主要な英語文献での初出は、glocalize が Fortune 誌の1989年8月28日号、glocalization が *Advertising Age* 誌の1990年1月8日号であるという。
- (4) Robertson らは、世界にただ一つの(単数の)西洋流の modernity しか存在しないのではなく、地域や地方ごとに異なった複数の modernities が存在するものと考えている。
- (5) *The Cambridge Dictionary of Sociology* (2006) や *A Dictionary of Sociology* (3rd ed. Revised, 2009) もほぼ同様の定義をしている。
- (6) このような観点から、成城大学グローバル研究センターを拠点として平成23(2011)年度から開始する「グローバル研究プロジェクト」(「社会的・文化的な複数性に基づく未来社会の構築に向けたグローバル研究拠点の形成」)では、グローバル研究の基礎理論の他、「社会接触」、「コミュニティ再編」、「経済社会動態」、「文化表象」、及び「歴史認識」等の研究トピックに取り組む予定である。
- (7) 出身国の国籍(市民権)を保持したまま移民先国で永住権を取得するなどして居住する人々はデニズン(denizen)と呼ばれ、自国民(citizen)と外国人(non-citizen)の間に位置付けられている。近年、永住権を保持するデニズンが急増

するとともに、参政権の付与など、デニズンの権利が拡大されつつある。また、複数の国の国籍（市民権）を同時に持つ重国籍（dual/multiple nationality/citizenship）を「容認」する国が増加し、すでに世界の半数以上の国で重国籍の取得が可能となっているという（Faist 2007: 1）。

- (8) トランスナショナリズムは元来、「トランスナショナルな+状態」(transnational + -ism) を意味する。この場合の接尾辞-ism は主義や主張ではなく、状態を意味する。従って、トランスナショナリズムは、時として誤解されているように、ある国のナショナリズム (nationalism) が国境を越えて広がっている (trans-) という意味ではない。また、文化や価値観などが国境を越えて広がっている状態 (transnational な状態) を望ましいものとして希求するような主義や主張を意味するものでもない (上杉 2004 参照)。

参考文献

Abercrombie, N., Hill, S, and Turner, B.S.

2006, *The Penguin Dictionary of Sociology* (5th ed.). London: Penguin Books.

Faist, Thomas

2007, Introduction: The Shifting Boundaries of the Political. In Faist, Thomas and Kivisto, Peter (eds.), *Dual Citizenship in Global Perspective: From Unitary to Multiple Citizenship*, Houndmills, Hampshire: Palgrave Macmillan, pp.1-23.

Macionis, John J. and Plummer, Ken

2008, *Sociology: A Global Introduction* (4th ed.). Harlow, England: Prentice Hall.

マクルーハン、マーシャル

1986, 『ゲーテンベルクの銀河系—活字人間の形成—』(森常治訳) みすず書房 (McLuhan, Marshall, 1962, *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press)

1987, 『メディア論—人間の拡張の諸相—』(栗原裕・河本仲聖訳) みすず書房 (McLuhan, Marshall, 1964, *Understanding Media: The Extensions of Man*, Routledge)

松村 明 (編)

2006, 『大辞林』(第3版)、三省堂。

Robertson, Roland

1992, *Globalization: Social Theory and Global Culture*, Sage Publications (抄訳 R. ロバートソン [阿倍美哉訳] 『グローバリゼーション—地球文化の社会理論—』 東京大学出版会、1997)。

1995, Glocalization: Time-Space and Homogeneity-Heterogeneity. In Featherstone, M., Lash, S and Robertson, R. (eds.), *Global Modernities*, London: Sage Publications. pp.25-44)

Scott, John and Marshall, Gordon (eds.)

2006, *The Cambridge Dictionary of Sociology*, Oxford: Oxford University Press.

新村 出 (編)

2008, 『広辞苑』(第6版), 岩波書店。

Tulloch, Sarah (comp.)

1991, *The Oxford Dictionary of New Words*. Oxford: Oxford University Press.

Turner, Bryan S. (ed.)

2009, *A Dictionary of Sociology* (3rd ed. revised), Cambridge: Cambridge University Press.

上杉富之

2004, 「人類学から見たトランスナショナリズム研究—研究の成立と展開及び転換—」
『日本常民文化紀要』第24輯, (1)-(41)頁。

2009a, 「グローバル研究の構想—社会的・文化的な対称性の回復に向けて—」上杉富之・及川祥平 (編) 『グローバル研究の可能性—社会的・文化的な対称性の回復に向けて—』(シンポジウム報告書) 成城大学民俗学研究所グローバル研究センター, 14-26 頁。

2009b, 「『グローバル研究』の構築に向けて—共振するグローバリゼーションとローカリゼーションの再対象化」『日本常民文化紀要』第27輯, (43)-(75)頁。